わが国合繊工業の発達

The Growth of the Synthetic Fibre Industry in Japan

佐古田 正 昭

わが国の繊維産業は広い裾野を持ち、大戦前の日本経済を長い間支えて来た基幹産業であった。大戦により設備は壊滅状態となったが、政府の繊維産業復元優先政策によって昭和24年にはほぼ戦前の体制にまで復元された。

ところが大战中かすかな情報として、米国において新しい合成繊維が開発されたらしい。デュポン社のカロザースが長年の研究成果として、ナイロン(Nylon)の特許取得と工業化に成功し、「水と空気と石油からつくられ、鋼鉄の様に強く、くもの糸の様に繊細なナイロン」と言うキャッチフレーズとともに宣伝されている。このニュースは内容が判るにつれて目を追って大きくなり、日本の朝野に大きな衝撃を与えた。

わが国においても終戦と同時に合成繊維の研究が再開されたが、長い戦争のため諸外国からの文献、情報は途絶えていた。戦後漸く24.5年頃から米国を始めとする海外の学術誌、特許明細が見られるようになった。

戦時中の衣料に対する国民の不満は深刻で、政府は衣料品の切符制により国内需要を抑えるとともに、合成繊維の育成をはかったが急には間に合わなかった。

ところが昭和25年6月に朝鮮動乱が勃発して、その恩恵で既存の繊維産業は一挙に好況となり、昭和26年には衣料切符制が廃止され、繊維取引所が再開された。

一方合成繊維の育成対策が昭和24年に発表され、昭和25年にはビニロン、ナイロン、ビニリデンの試験生産が開始された。この日本政府の合成繊維の育成対策は敗戦国としては資金・税・原料などあらゆる面において考えられる最も手厚いものであった。

当時米国のデュポン社は既に150T/Dのナイロン生産能力を持っており、世界のナイロンメーカーのほとんど全てがデュポンから技術導入していた。日本の東レも自前の技術開発では時間がかかり過ぎると判断して、昭和26年6月にはデュポン社と技術導入を締結した。

この技術導入の対価は高額なものであったが、東レはデュポンの特許を自由に使用できることになり、糸質も向

上し、生産コストも10~15%低下した。これによって東レは長期にわたり日本合成繊維のトップの座を維持した。

朝鮮動乱の特需ブームで日本の繊維産業は急速に増強され、国民一人当りの繊維消費量も昭和28年には戦前の昭和10年の水準に達した。繊維企業はいずれも動乱により巨額の利益を挙げたが、化繊会社はその利益をあげてレーヨン設備の合理化と合成繊維の工業化に投資した。

昭和26年9月にはサンフランシスコ平和条約、日米安保条約が調印され、昭和30年にはGATT、31年には国連に正式加盟した。かくして日本は急速に国際化の道を進み始めた。つれて合成繊維も拡充を続け、化学繊維工業協調懇談会、いざなぎ景気を経て昭和45年には生産量が全世界の20%を超えるに至った。

この頃が合成繊維の黄金時代であって、その後、ニクソンショック(昭和46年)、MFA(昭和47年)、オイルショック(第一次 昭和48年、第二次 昭和54年)などとわが国に不利な内外情勢が連続しておこり、その都度先ず輸出が制約を受け、続いて国内の需要供給のバランスが大きく崩れた。

この間、国内メーカーの過当競争体質、抜け駆け体質も不況増大の大きな要因となった事は深く自戒しなければならない。昭和53年頃からわが国合繊産業も不況の様相が一段と深刻となって来た。業界としては繊維在庫の合繊メーカーの買い上げを実施したり、減産の不況カルテルを締結したりしたが結局効果があがらなかった。

通産省は最後の手段として勧告操短を発動し、ひき続いて昭和55年には第一次、第二次の設備廃棄を指示した。設備廃棄はナイロンF20%、アクリルS20%、ポリエステルS18%、同F10%と言う高率であった。これによって合繊の市場は漸く下げ止った。

一方わが国の周辺諸国、特に台湾、中国、タイ等は国を挙げて合成繊維の発展に努め、生産量、輸出量は急速に増大し、それらは専ら日本向けに集中した。わが国の繊維品消費の輸入浸透率は72%に達した。日本の合繊企業はこれを見て普通合繊の生産に興味を失い、特殊合繊の開発を急いでいる。

識者はわが国経済人の過当競争を非難する。しかし過当競争を勝ち抜いて行かなければ当該企業は脱落する。お互い話し合って行けばもっと利益が得られるであろうことは目に見えている。しかしその点こそ独占禁止法が禁止しているところである。それでも企業は営業活動を進めて行かざるを得ない。

MASAAKI SAKODA

元日本化学繊維協会 理事長

〒166-0003 東京都杉並区高円寺

南5-31-9

Tel: 03-3312-8982 Fax: 03-3312-8982

〈専門〉繊維工業

〈趣味〉囲碁、登山